加賀藩御定書卷十一

御郡方御定書

一　寄鯨分配方御定

三ケ國浦方ゟ寄鯨有之刻割符仕様御定覺

一、鯨寄候居村ゟ、十歩之圖を以五歩可被下事。

一、右居村濱ならび兩脇三ケ村宛六ケ村ゟ、二歩宛可被下。但三ケ村つゞき無之、二ケ村有之候而茂同前之事。

一、右居村近所里方三ケ村ゟ、一歩可被下事。

右之趣被仰出候條、可成其意候。鯨寄候はゞ、御在國之時分は早々小松ゟ可申上候。御留守之刻者此方ゟ可及案内者也。

承應二年二月十五日　　横山右近
　　奥村河内

能登浦方十村中

二　御郡中品々御定

郡中之儀不依何事算用場ゟ相達可請差圖事。

一、耕作精に入候様に、十村・肝煎并小百姓中ゟ切々可申渡、諸給人下代在々ゟ不遣候間、納所無滞十村・肝煎裁許仕候様に可申付事。

一、草高に懸郡打銀申付、其手合之十村方に取集、十村衆付に郡奉行裏書を加、銀奉行ゟ渡置、郡入用に拂切候旨、重而右之圖を以打銀可仕事。

一、郡中切々廻り、用水・川除并道橋損候所有之候者、算用場ゟ相斷、修理可申付事。

一、用水・川除入用之材木、在郷道之橋懸直候材木、林之竹木被下候間、十村切手に郡奉行致裏書、山奉行方より請取可相渡。手先之奉行人有之時者、其奉行与郡奉行衆付を以、材木請取遣可申候。人足并入用(ヶ)又者林之木に而不成橋之分者、郡打銀を以材木可相調。附り、往還筋道橋修理入用銀は、過料銀を以可相渡事。

一、郡中百姓出入之儀、算用場ゟ申聞、指圖次第落着可申